コメント1：新ヶ江章友（大阪市立大学大学院創造都市研究科・准教授）

Comment 1: Akitomo Shingae (Osaka City University)

今日のコメントですが、私の研究と関係付けながら話した方が、私自身も話しやすいですし、皆さんにも理解していただけると思ったので、まず、私の専門の話と絡めながらコメントさせていただきます。

私はジェンダーのことを研究していますが、どちらかというと、ジェンダーよりセクシュアリティの方に関心はありまして、特に、日本の「ゲイ」について、もう20年弱ぐらい研究をしています。セクシュアリティの問題でも、特にHIVとの関連で研究をしております。

本日のコメントですが、性の問題について研究するときに、二つの視点があるのではないかと私は思っています。一つは、例えば、私が研究している日本の「ゲイ」のことを研究するときに、「ゲイ」の人たちがどういうような性行動をとっているのか、彼らがどういう会話をしているのかなど、「ゲイ」の人たちの生活習慣や行動そのものを対象にする研究のやり方があると思います。もう一つは、その「ゲイ」という主体やカテゴリーがどのように作られていったのかを研究するという視点のあり方、この二つのやり方があると思います。

本日の発表の中でも、その二つの視点が、かなりはっきり出ていると思います。一つは、加藤先生のご発表ですけれども、ここでは、性を対象にする「表象の研究」と表現したいと思うのですが、例えば、ある性文化について文化人類学者が研究するときに、それをどのように民族誌として書くのか、これが表象の問題ですが、それは、私も「ゲイ」の研究をするときに、ずっと悩んできた問題です。例えば、日本の「ゲイ」の人たちの民族誌を書くときに、「ゲイ」の人たちの性行動についてインタビューをしたり、フィールドワークで性文化についていろいろ調べてきた訳ですけれども、それを書くというときに、彼らがこういうHIVに感染するリスクの高い性行動をしていたとか、彼らがこういうことを語っていたとかをそのまま書いてしまうと、そこにはやはり、書くものと書かれるものの間に権力関係が発生すると思います。それは、「どういう立場で書くか」というところにも違いがあるとは思うのですが、例えば「ゲイ」の研究者が「ゲイ」のことを書けば、それは権力関係を免れているのかという問題があります。私の場合は、「ゲイ」という立場で「ゲイ」の研究をしてきた訳ですが、それでも、「ゲイ」の性文化をどう表象するかというところは、とてもデリケートな問題であったので、ずっと書くことに悩んできた訳です。

したがって、今回加藤先生がおっしゃられていた、誰が、どのポジシ

ョンで民族誌を書くのかというところには、必然的に権力関係が発生するわけです。しかし、外国人が日本のことを表象する際、そこに権力関係が働くけれども、日本人が日本人のことを表象すれば権力関係から免れるのかという問題があると思います。私が「ゲイ」で「ゲイ」のことについて表象するときにも、書き方によってはそこに権力関係があり、表象のされ方にもいろいろ問題が出てくる訳です。したがって、その点について加藤先生に、例えば、西洋人が日本のことを表象するときに権力関係があるのであれば、当事者が当事者の研究をするところに権力関係はないのかということについて、ご意見をお伺いしたいと思います。

加藤：ゲイがゲイのことを書く、日本人が日本人のことを書く場合においてもパワーリレーションシップは当然あると自覚している。以前、英語で書かれた日本人女性のエスノグラフィーを読んで、これはひどい誤解が書かれていると思い、日本人女性の私が日本人女性を研究してやろうとネイティブ・アンソロポロジストとしてのプライドを持って研究し、それを日本語で発表したところ、一般読者から、「貴方は私たちの立場に立っていない」という批判のコメントが来た。アカデミックな目線から書いているということや、普段自分が使っていないような用語を使って自分たちが描かれているといったことへの違和感はあるだろうし、嫌だろう。しかも私が活字で書いたものの方が、彼女たちの声よりも浸透する訳である。そういう意味で、自分もパワーリレーションシップを自覚している。コロニアルなまなざしとジェンダー化するまなざしというのは、誰が何を書いていても、必ず入ってくるので、人類学者はずっとそれに自覚的でなくてはいけない。

もう一つは、分析としてジェンダーを使うというやり方ですけれども、これは、松岡先生の発表と関係しているところだと思います。これも私の経験をふまえてお話したいと思うのですが、私が日本の「ゲイ」について研究するとき、先ほど言ったように、「ゲイ」のことを表象することの権力性にいつも意識がありました。それは、彼らがどういう性行動をとっている、どういうことをやっているのかということを赤裸々に、その文化を書くということの権力性について、実際、「ゲイ」の人たちからいろいろなクレームが来ることもあるし、自分がそれを書くことも、すごく躊躇した訳です。私はそれをどのように回避したのかというと、「ゲイ」というカテゴリー、例えば、ジェンダーで言うと女性というカテゴリー、男性というカテゴリー、あるいはトランスジェンダーというカテゴリー、そのカテゴリーがどういう権力関係の中でカテゴリー化されていったのかに注目して民族誌を書きました。例えば、私の研究で言うと、日本のゲイ・コミュニティ、あるいはゲイ・アクティビズムは、どういう文脈でカテゴリー化されてきたか。私はそれをHIVの文脈で研究したのですが、科学的な力、公衆衛生的なHIV施策の中で、ゲイ・コミュニティとか、ゲイのエンパワメントとかの問題が出てきました。私は、「ゲイ」の人たちの性をめぐる文化そのものを書くのではなくて、そういう

カテゴリーがどのようにしてできてきたのか、それは、国家との関係でもあるわけですし、松岡先生がおっしゃった経済的なもの、政治的なもの、あるいはピコーネ先生のお話だと、宗教的な問題、そういうところとの関係の中でカテゴリーができてくるわけです。そういう様々な権力関係の中で、ジェンダー、あるいは性の問題をめぐるカテゴリー化がなされてくるわけです。したがって、私の問題関心は、どちらかというと、その性文化をべったり記述するというのではなくて、そのカテゴリー化がどのようになされてきたのかが、ジェンダーやセクシュアリティ研究のあり方の一つの方法なのではないかと考えました。

ここで松岡先生への質問ですが、松岡先生の発表の最初に、ジェンダー論と文化人類学という二つの学問領域は違っていて、その両者にまたがって教育をされている松岡先生自身の居心地の悪さがあるとおっしゃいました。どういうことかというと、ジェンダー研究というのは、抑圧された女性の状況というものについて、女性たちがエンパワメントして、女性が男女平等を達成するためにどのように政策をうっていくかということを研究するのがジェンダー論であって、そのジェンダー論は、文学研究であったり、宗教学であったり、いろいろな分野でこのジェンダー視点を持って研究されている訳ですけれども、一方、文化人類学の場合は、文化相対主義という考え方があるわけです。したがって、このジェンダーという西洋的な概念を用いて異文化研究をすることは、松岡先生の言葉を使うと、ジェンダー帝国主義という言葉を使われていたのですが、その西洋的価値観で異文化を見ていいのかどうかというお話をされていたかと思うのですが、松岡先生の今日のご発表の最後のところで、それでもやはり西洋起源のジェンダー概念を用いて異文化を研究することは、いろいろな女性の不平等やエンパワメントのためには重要だということが述べられました。ご発表の最初と最後のところで、最初は二つのもの、つまりジェンダー論と文化人類学が分かれていたのですが、最後はやはりジェンダー視点を持った異文化研究が必要だという話になっていたと思います。そこの最初と最後のところのつながりについて、もう少しお話をお聞かせいただければなと思います。

松岡：最初と最後で、どこかでねじれてしまったのではないかというご指摘だが、最後にジェンダー視点は重要だということに関して、2 つの理由を挙げた。1つはジェンダー概念を用いることで弱者のエンパワメントにつながるということと、もう1つは全世界に普遍的な共通するルールを持たないと、世界が抱える問題を解決できないということだ。それぞれの文化が、それぞれ独自の男女の関係や、ジェンダーに関するエスノコンセプトを持っているとすると、現代は西洋のジェンダー概念が世界を制覇してしまったということになるのかもしれないが、その方向性を私は良くないとは考えていない。世界が何らかの共通のものを持たなければいけないと思っているからだ。しかしその一方で、価値観が大きく対立する世界の現状を見たときに、ジェンダー概念や西洋的な価

値観への違和感がまったくないわけではない。その違和感は簡単にはなくならないのだろうと思っている。そして、そのような居心地の悪さを少しずつ克服しながら世界に共通する価値観やルールを作り上げていくのだと思う。

最後にピコーネ先生への質問ですが、表象の問題と分析視点としてのジェンダーという二つの視点からですが、まず表象のことについて言いますと、日本の水子についての研究は、先ほど加藤先生がおっしゃられたように、日本人の女性は力がない犠牲者的な表象がされるということが、十数年前、文化人類学の中でも議論がありました。西洋の研究者が日本の研究をするときに、力がない女性という表象がされるということがありましたが、その点について、先生の本日の発表ではそのようなことは直接おっしゃっていないですが、一般的にそのように言われることについて、先生のご研究の視点からどのような反論ができるのかをお伺いしたいということと、もう一つは、そもそも先生がなぜこの日本というフィールドで、水子供養ということについて関心を持たれて研究をされているのかということです。先生のご研究での立場性についてお伺いしたいと思います。

ピコーネ：非常に大きな一般化が行われていることがあるが、私は日本の女性を、力の有無にかかわらず一様な存在としてみたことはない。これは私の報告のポイントでもある。水子供養への関心については、何年も前、初めて日本に来た時に、その存在を知り衝撃を受け、新しい宗教現象ではないかと考え興味をもった。それからいろいろ調べ始めたが、当時は先行研究もほとんどなかった。研究を進めるうちに、ある人々にとって日本は「他者」であるのだと感じたが、私は、女性として、女性の身体を持ち、同じ苦しみを経験するのだから、共感という理解ができるはずと考えてきた。この共感が完璧なものになり得ないことは認めるが、それを試みることは可能である。